

珍貴な史料“陣鐘”

この決戦を戦ひ抜いてゐる重大な時局にあつて、銃後國民が自發的に國策に協力して、家庭の金屬を舉げて銃に、彈丸に代へ、米英撃滅のために供出してゐるが、富山縣下各寺院でも、お相傳の梵鐘を供出してこれに應へんとしてゐる。これ等の喚鐘について、工藝上、歴史上の存置價值につき、富山市史蹟調査員大村正之氏が調査中のところ、はからずも、今度全國的に類例の少い半鐘が發見され、郷土史料上にも貴重な發見として關係各方面から注目、存置方を懇願されてゐる。大村氏の調査研究の結果、これは『陣鐘』であると認定され、斯界の權威柴田常惠氏及び京都帝大梅原末治博士の考證にも稀なものであるから、是非保存方を手配するよう依頼してゐる國寶級にも比すべき珍重なもので近く重要美術品として認定申請方を文部省に提出されることになつてゐる。

大村氏の調書によれば、この喚鐘は富山市梅澤町一三三眞宗大谷派慶念寺の所有の銅製の鐘で、總高は曲尺一尺五寸、口徑八寸三分、唇厚八分、重さは二貫七百匁で、喚鐘としては小型に屬し、容易に持ち運ぶことが出来るものである。また音響は非常に遠くまで達し、音色も極めて清澄なものである。喚鐘といふものは、一般に型は小さいが、梵鐘と相似した形のもが普通である。即ち、龍頭、乳帶、袈裟襷等を備へてゐる筈のものであるが、この喚鐘には全然これがない。一見して單調なその上、様式も異つた印象を受けるものである。龍頭のかはりに棒狀の釣輪があり、乳帶部には一個の乳もなく、袈裟襷もないが、これにかはつて二本の平行線で上部と區切り、更に撞座の上下部にも三本の平行線を横たへた單純な裝飾が施されてゐるばかりである。

これらの形から見ると、京都の南蠻寺の鐘（現在京都市妙心寺塔頭春光院所存）と外觀が偶然に類似してゐる點がある。しかも、この喚鐘の撞座には普通の梵鐘や喚鐘にある蓮華紋のないことが注意すべきことである。またこの銘帶部に相當するところには銘文が缺けてゐるが、この部には珍稀な北斗七星紋および六曜日紋が表裏對稱の位置に附せられてゐる。すなはち一方には徑三寸と二寸の二重圓があり、そのなかに北斗七星をあらはす七個の星と、その破單星の上に劍先を揚鑄し、外側の二重圓内に十二支、すなはち、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥の十二文字が陰刻してある。その反對側には徑二寸八分の圓内に、六曜日、すなはち、先勝、友引、先負、佛滅、大安、赤口を圓示したものがあつた。この二つの紋様こそは全然他鐘にその類例を見ないところで、この鐘は何に使用されたものかが問題になるわけであるが、これら

のことから全く特殊な存在で、龍頭は極型、乳および袈裟襷はない。撞座に蓮華紋がついてゐないことから見て、これは佛寺関係のものとは認め難い。また十字架、イスエタ紋章あるひはマリヤ像等のないことから、これまた南蠻寺鐘等に相似してゐる點があるが、切支丹關係のものでもないことが明らかである。この鐘についてゐる北斗七星紋は、戦陣に關係ある北斗七星に象つたもので、妙見信仰にもとづくものである。妙見菩薩は諸國土を擁護し、災を消し、敵を却け給うもので、わが國の武將の間に古くから崇敬されてゐたもの、一面武藝十八般の中にも天文あるひは天體觀測が含まれ、これに通曉することが武將たるものの資格ですらあつた。したがつて、軍配、團扇の紋様にも往々見出だされてゐる。六曜日は勝負、吉凶に關するもので、これも戦陣に關係してゐる紋様である。これらを綜合して見ると、本鐘は『陣鐘』として特に鑄造されたものであることは明かであると考へられる。古來軍陣の間に陣鐘が使用されたことは多いが、それはその附近の寺院の鐘を多く使用したものであつた。しかし、この目的で製鑄したものや、これに類したものは多かつたであらうが、この鐘のやうに陣鐘として製造されたもので、いまなほ残つてゐるものは甚だ乏しく、珍重すべきことで、このことは既に斯界の權威柴田氏が保存方配慮を特に懇望してゐることを見ても確實なものである。ただ無銘鐘（唇口部に磨滅したところがある）で、製作年代がわからないことは遺憾であるが、笠形、駒爪その他から推して、江戸中期ごろのものでなとか推定されてゐる。なほ、この鐘が同寺に傳へられたのは明治三十五年ごろに先住岩崎靈支師が京都から買ひもとめて來たものであるとのことで、現住岩崎靈明師は語る。「大村先生の御調査で、當寺の半鐘が非常に珍貴な史料であると聽かされて驚いてゐる次第です。先生の盡力で重要美術品として存置されることになれば、當寺としても大切に保管せねばならぬと考へてゐます。」(昭和一八、六、一八、北日本新聞)

會員津田氏よりたより

御免

昨日、例の陣鐘を見學に参りましたから、素人目に見たるまゝ、その概要を報告申し上げます。

郷土ながら、富山市にあんな寺町があることは今日まで知りませんでした。梅澤町には西、東の兩町あり、共に寺院許りの町で、大小の寺々翹集してゐるのには驚きました。慶念寺の所在を訪ね出すのに、可なり彼處此處訪ね廻りました末、やつと見つけました。小路の奥まつた所にある閑寺と申すべきか、寺の中でも小さい寺で、厨と御堂とが一つになつてゐる様な一寒寺でした。

訪ねて、來意を通ずると、主婦らしい方が、心易く「這入つて見て下され」とて、玄関直ぐの一室に案内せられました。奥の方から、その鐘を兩手で持つて來て、私の前に置いて

て「これですと」示さる。

女手で樂に持ち運びが出来るとの思ひ、私も試みに持つて見ると、片手でも持てる程のもの、二貫七百匁の重さと聞きました。底徑九寸位、高さ一尺二寸位のもの、普通の梵鐘型ですが、青銅色ではなく、眞鍮色を帯びた色で、銹もなく、古めかしい氣分は寧ろありません。

外に釣つておくと、要心が悪いので、奥の方に平常は納つてあるのだと言ひます。叩いて見ると、音は澄んだ、輕やかな、而も感じの良い響きを出す様でした。富山別院に何か行事がある場合に限り、此の鐘を借りて行つて、使はるゝ例になつてゐるさうです。

之の鐘の沿革などは餘りハツキリ判つてゐない様でした。大村教授が色々研究してゐられるとの事でした。

鐘の概形は別圖(1)の如くで、本略圖に示す模様の外には、何等彫彩もありません。

打ち叩く所が兩方にあつて、その左右に(2)(3)の如き模様が鑄抜いてありますが、何れも環部に何か字が彫り込まれてゐた様な形跡をおぼろに想像出来る位で、スツカリ態と削り消した痕跡が明かでありまして残念乍ら字は一字も讀める程度の條も認められません。

鐘底環面にも、何か字が十六字も彫り込んでありますが、之れも、何といふ字か判らぬ様に削り消して終つてあります。何の必要から、こんなに削り消したものか、惜しいものです。

但し(2)の北斗の紋は、圖の如くハツキリしてゐます。劍先をつけてあるのは面白いと存じました。この外環部に何といふ字があつたものか、又(3)も、六曜はハツキリしてゐますが、その間にあつた字は一字も見えず、削り跡だけが残つてゐるのです。

釣鈎は、圓柱を曲げて取りつけた様な形、その着部一方のみに突起部が鑄附いてゐますが、何のためのものか、私には判りません。

昔の戦陣では、その附近の寺の半鐘を持ち出して、陣鐘に使用するを例としたさうですが、陣鐘と言はるゝものは、軍が常に携行するものだつたさうです。

之れが陣鐘なりとすれば、何藩が使つてゐたものか、土地柄上、恐らく前田藩かなと、素人考へに思つたりしました。

見學すること約二十分で終了、もう一度叩いて見て辭して歸りました。

昭和18年7月1日 津田雅三

